★http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/★

徳島大学　全学共通教育センター

週刊 学びのコミュニティー

第57号

平成22年7月7日発行

【授業紹介　No.3】

第３弾は、教養科目『日本語の音声』（前期　木曜日 3･4 時限）
教養科目『方言と社会』（後期　木曜日 3・4 時限）
これらの授業についてご紹介いたします。

前期の「日本語の音声」では日本語の音声をテーマにして、共通語の音声・アクセントについて学びながらそのバリエーションである全国各地の音声を取り上げ、その特色を解説しています。後期の「方言と社会」では、日本の方言の地域差を話題として取り上げ、方言が社会にどのように関わっているのか、その解明を試みつつ、言語社会の構造や、地域言語の特色ついて受講生の方々と考えていくつもりです。

日本の方言には、たいへん興味深い点が多くあります。その一つは、日本語の歴史との関係です。日本語の音声の歴史と、方言音声の分布を比べてみると、たいへんよく似た現象が多く見られます。例えば「じ・ず・ぢ・づ」を日本語学では「四つ仮名」と呼びますが、もともとこれらの発音はそれぞれ異なっておりました。古い文献によると、「じ・ぢ」、「ず・づ」は江戸時代に入る前までにそれぞれ発音の区別が完全に失われてしまったことが分かります。これは当時の中央語であった京都語で起きた現象ですが、地方の方言にはこの変化が生じず、現代まで残っている方言があります。高知県の方言や九州地方の方言です。かつて都で起きた言語変化がそのまま、地域言語に残存したケースです。このような例は、日本語の諸方言に多く見られ、音声だけではなく、語彙や表現にも現れます。例えば、八丈島の方言には、万葉集の東歌にみられる特殊な表現法、「白け雪（白き雪）」「書こ時（書く時）」などのように万葉集の時代にすでに東国の方言として意識されていた表現が今なお、残っています。かつて関東や東北の地方にもあった表現ですが、これらの地域では消滅したものと考えられています。

授業では、このような例をいくつも提示し、中央で起きた日本語の変化と地域方言の関係についてみていきます。昨今、日本語の諸方言には、各地で世代差がみられ、伝統的な方言が失われつつあります。高知の方言の「四つ仮名」の発音の区別や、八丈島の特殊な言い回しもほぼ高年層の方々の方言に残っているに過ぎません。東北の方言からもどんどんズーズー弁が消えようとしています。この点で、日本の諸方言は危機に瀕しているということができます。一度、失われると、二度とその方言を母語とする話者は現れません。

昨年、ユネスコが沖縄の宮古島の方言や沖縄の奄美方言、そして八丈島の方言など日本の８つの方言（言語）を消滅の危機に瀕する言語に指定しました。これらは世界の 2,500 言語のうちに含まれます。このような視点を交えて、日本語の諸方言音声のバラエティや方言変化のありようを説明しています。教養科目群のこれらの授業を通じて、言語文化の視点から地域の言語に興味を持って頂き、今後の日本語の方言について考えてもらえれば有り難いと思います。（文責：岸江　信介）

～編集後記～今日は七夕。息子と一緒に笹飾りを作りました。短冊にしたためる願い事。かつては私も息子のように〝～になりたい〟〝～へ行きたい〟などいくつも願い事があった気がしますが･･･今はただひとつ、家族みんなが健康に、笑顔で過ごせること。みなさんの願い事はなんですか？（境）